

真夜中と正午 ―ニーチェの永遠帰郷思想の二つの時

中路 正恒

序 細道

一八八二年八月ニーチェとルー・フォン・ザロメ、そしてニーチェの妹エリザベトの三人は約三週間をタウテンブルクの村で過ごす⁽¹⁾。実質上はニーチェとルーの二人が同じところで日々を過ごすということが中心でエリザベトは世話係といった役割になるだろう。その期間ルーは友人のパウル・レーに見せるための日記を書いているがその手紙日記の八月十四日のところに次のような記述がある。

»Die Erinnerung an unsere italienische Zeit kommt uns oft und ..

[*] ...schmalen Steig aufwärts gingen, sagte er leise»monte sacro,- den entzückendsten Traum meines Lebens danke ich Ihnen.«⁽²⁾

ルーは「わたしたちのイタリアの時の思い出がしばしばわたしたちに訪れた」と語っている。これを十四日に記しているところからして記憶の訪れはこの共同生活の前半の日々にしばしば訪れた出来事であって、それは必ずしも十四日の出来事とは限らないと理解できる。だがしかしこの思い出には二つの重要な契機が伴っている。それはやや宙吊りの「schmalen Steig aufwärts gingen」と記されていることの問題であり、ここにはその前の「*」をつけた部分に複数の語の欠落があるのである。ここは例えば»wenn wir zusammen«ぐらいを補足すれば文の形は整うのだがそれには何かの迷いがあったのだろう。ともあれここでは「わたしたちが」細い坂道を上って行った時」というその状況を示しているのである。重要な契機のひとつはこれがルーがニーチェと二人きりで上って行った時を指しているということである。想定されているイタリアでの時のなかでニーチェとルーが二人きりでいた時間は少なく、それはほぼこのオルタのモンテ・サクロに上った時だけだったのだ。そのときルーの母のザロメ夫人

とレーはこの聖山に上らずホテルで待機していた。上掲の文章はその時のことをこの滞在中のタウテンブルクの細い坂道を上っていて強く思い出したということの意味している。このタウテンブルクの「細い坂道」はタウテンブルクの城山への細道と想定される⁽³⁾。細道を二人で上るという経験の共有、それがわたしが重要視したいもうひとつの契機である。モンテ・サクロの細い山道がタウテンブルクの城山の細い坂道と重なり城山への道を上りながら二人の間にはきわめて親密な時空が生まれるのである。ふたりがモンテ・サクロで過ごした親密な時空がここで倍加される。そこでニーチェは小さな声で次のように言ったという。「モンテ・サクロ、――わたしの人生の最も魅惑的な夢をわたしはあなたのお陰で得ているのです」と。ここで「danken」は現在時制で使われており、感謝の情はいままさにあると言っている。それは必然的にではないが「人生のもっとも魅惑的な夢をいままさにあなたのおかげで思い描いている」という夢の現在も含意されていると考えられる。なぜならそれに反する何ごともないからである。ニーチェの今の気持ちの告白。それでこそルーが書きとめておくべき言葉だったのだ。

この時、タウテンブルクの城山への細い坂道で二つの時がひとつに重なる。そういう一つの経験の実在がこのルーが伝えるニーチェの短い言葉から読み取れる。それは細道で、ふたりだけの空間が形成される危険な細い道で生じる出来事である。それはこの言葉を小声で語ったニーチェだけに生じた出来事ではなく、その言葉を聴きとり、記憶し書きとめるルーにおいても生じた出来事である。ここにおいて二つの時は一つになったのではないか。モンテ・サクロの細い坂道の時とタウテンブルクの細い坂道の時が一つになったのではないか。»Eben ward meine Welt vollkommen, Mitternacht ist auch Mittag.«とニーチェはある重要なところで記している⁽⁴⁾。「今まさにわたしの世界は完全になった、真夜中はまた正午でもあるのだ」と。ここでも二つの時がひとつであると言われている。二つの時を内的に繋ぎ同一とするある要素、ある本質、それは何なのか？ 一瞬にせよそのとき一つの世界が完成したのである。完成が、あるいは完全が存在する。ニーチェにとってもタウテンブルクの細い坂道で二つの時が一つになった。神秘的ともいえる一つの瞬間。流れる時が運命となる一瞬の時。世界の完成。世界が完成する時、そして完成した時。世界が完成したときそれは必ず過去形で語られるのではないだろうか。上掲の文章でニーチェ

は過去形の「ward」を使っている。「なった」という意味である。二つの時がひとつになるとき完成は過去になる。完成に過ぎ去られてしまうのだ。これはどういうことだろう。生成が、生成するという変化の時間が、存在という無時間の時になるということではないだろうか。完全もしくは完成が存在する。そのとき完全は生成しなくなる。わたしの世界は完成し終え、生成しなくなるのだろうか？ ニーチェにとつてはわたしの世界が完全になるという事態が存在するのである。

それではこの事態はニーチェが「永遠帰還」と呼ぶものとどう関係するのであるのか？ 世界の完成について語るもうひとつのところでニーチェは「永遠の井戸」(Brunnen der Ewigkeit)と言っている。「わたしは落下しているのではないか？ 落下したのではないか——耳を澄ませ！ 永遠の井戸の中に？」(拙訳「Zar IV:10」正午)と。世界の完成はまずもって生成の世界から永遠の井戸への落下の体験としてニーチェの身体に刻みこまれているようである。この体験はある眼りの体験として、「わたし」のある種の二重化をともなった体験として語られている。その段落を日本語訳と共に示そう。

»--- Was geschah mir: Horch! Flog die Zeit wohl davon? Falle ich nicht? Fiel ich nicht --- horch! in den Brunnen der Ewigkeit?«
わたしはどうなったのだろうか？ 耳を澄ませ！ 時は飛び去ったのか？
わたしは落ちているのではないか？ わたしは落ちたのではないか？ 耳を澄ませ！——永遠の井戸の中へ？ (拙訳)

ニーチェの永遠帰還の思想の根源をなす永遠帰還の体験は『ツァラトゥストラはこう言った』のなかのこのような詩的な言説のなかにもっともよく示されているのである。われわれは『ツァラトゥストラ』の中の「醉歌」と「正午」の二つの箇所の読解を通じて、あるいはそれらのテキストに「耳を澄ませる」ことによって、二つの時を一つのものとする永遠帰還の思想の時間性の根底を探ってゆくことにしよう。

第一章 「真夜中はまた正午でもある」

この論考で中心的に考察しようとする言葉、すなわち »Eben ward meine Welt vollkommen, Mitternacht ist auch Mittag.«^⑤ は『ツァラトゥストラはこう言った』第四部19章「醉歌」の第10段に記されている。そのところ氷上英廣の日本語訳を示せば「いままさにわたしの世界は完全になった。真夜中はまた正午なのだ」である。ここからまず読み取れるのは、1. 世界が完全になる時が存在し、2. その時においては真夜中がまた正午でもあるとして把握される、と主張されているということである。こう語るのはツァラトゥストラであるが、それを彼は、救いを求めて彼の洞窟にやってきてそのあけくにロバを神としたたえる奇妙な祭りを催行した「ましな人間たち」(höhere Menschen)に語るのである。ツァラトゥストラは彼らに次のように問いかける。

「ましな人間」たちよ、あなたがたはどう思うのだ？ このわたしは預言者なのか？ 夢見る者なのか？ 酔える者なのか？ 夢を解く者なのか？
真夜中の鐘なのか？ (永上訳、p.325)
»Ihr höheren Menschen, was dunket euch? Bin ich ein Wahrsager? Ein Träumender? Trunkener? Ein Traumdeuter? Eine Mitternachts-Glocke?« (Zar IV:19 Nachwandler-Lied 10)

彼はツァラトゥストラが誰なのかを彼らましな人間たちに対して考えさせる。ひとりの「預言者 (ein Wahrsager)」なのか、ひとりの「夢見るもの (ein Träumender)」なのか、「酔える者 (Trunkener)」なのか、ひとりの「夢を解く者 (ein Traumdeuter)」なのか、ひとつの「真夜中の鐘 (eine Mitternachts-Glocke)」なのか。このツァラトゥストラの洞窟前の場面においてある事象の価値や語りの真実性は普遍的な理性によって定められるのではなく、その事象を解釈し評価する者が誰であるかによって異なった価値をもつという多元論の原則が確認される。そしてこの列挙の中で、ツァラトゥストラはそのなかの誰かというよりもむしろ「ひとつの真夜中の鐘」として語るのだということを彼らに知らしめる。

テキストはさらに次のように続く。

露のひとつくなのか？ 永遠をつたえる露と香気なのか？ あなたがたには聞こえないのか？ 嗅ぎとれないのか？ いままさにわたしの世界は完全になった。真夜中はまた正午なのだ、——（氷上訳）

»Hört ihr's nicht? Riecht ihr's nicht? Eben ward meine Welt vollkommen, Mitternacht ist auch Mittag. ...«

ツァラトゥストラはみずからを「露のひとつく（ein Tropfen Thau）」として、あるいは「永遠の露と香気（ein Dunst und Duft der Ewigkeit）」として、つまり永遠性の香気をもちつたえるがはかなく消え去りやすいものとしてみずからを示し、了解を彼らに要求する。この鐘のかすかな響きが、そしてこの芳ばしい香りがお前たちには聴き取れないのか、と。というののままにいまわたしの世界は完全になり、真夜中がまた正午でもあるという秘密がその香気によって漏らされているからなのだ。

このときツァラトゥストラの世界は永遠のしずくとして完全になる。この表現で「ward .. vollkommen」というところの時制に注目すべきである。「vollkommen（完全な）」という形容詞で示される事態が「werden」（成る）の過去形の「ward」によって「成った」と示されている。そしてそのときにこの真夜中はまた正午でもあるという真夜中の特別な秘密が開示される。これは「いま」真夜中の秘密であり、開示されるのは「いま」はわたしの世界が完全になった時である「過去」と微妙にずれており、そして実はこの時の微妙なずれによって時間が流れ、時が進むという深い秘密なのである。時は完全になることによって止まるのではなく、完全になることによって流れるのである。言い換えれば時は完全になり、そしてその完全さが瞬時に過去になることによって流れるのである。真夜中もまた真昼であり正午なのだと言われる。真夜中もまたその深い本質において正午として存在している。正午とは一として回収された多であり、断片として分散している多の一性なのである。これまで見てきたように「醉歌」で「真夜中はまた正午でもある」と言われる時、このとき完成し完全となる世界は、「わたしの世界」（meine Welt）であり、「世界」（die Welt）ではない。しかし第四部十章「正午」でその完成が語られるのは「世界」そのものの「die Welt」そのものである。この小さな差異は「一切一切」と「一切即一」との違いに對

応しているように見える。世界が完全になるということが最もリアルに体験されるのは「わたしの世界」の方であって、「世界」が完全になると定冠詞付きで語られるときの体験はその予知夢のような体験なのではないだろうか？ だがいずれにせよ時が流れるというこの深い秘密が開示されるためには世界の完全さが感得されることが必要であるように見える。われわれは次にその定冠詞付きの世界が完全になる／なったと語られる「正午」（Zar.IV.10）の章のテキストを点検してみることしよう。

第二章 「正午の深淵」

『ツァラトゥストラ』第四部第十章の「正午」（Mittags）はツァラトゥストラが彼の洞窟のある山にやってきた「ましな人間たち」（höhere Menschen）に出会い、彼らを彼の洞窟へと誘った後ひとりになり、正午になってある老樹のもとにきてそこで眠りたくなるところからはじまる⁶⁾。

—— こうして数時間がたった。やがて正午となり、太陽がツァラトゥストラの頭の真上にかかったとき、かれは曲がつて節くれだった老樹のそばを通った。（氷上訳、前掲書p.233）

このとき彼に「この完全な正午の時刻に、この老樹のかたわらに身を置いて眠りたい」という思いが湧きおこる。そのところ原文では »nämlich sich neben den Baum niederzulegen, um die Stunde des vollkommenen Mittags, und zu schlafen« である（強調は引用者）。時は「完全な正午の時」であり、⁷⁾ にすでに完全性、すなわち完成した時という概念が忍び込んでいる。こうして彼は目を開いて老樹とそれにからみつく葡萄の愛情を見て称賛しながら眠りに落ちる。眠りに落ちながら彼は自分の心に向かって次のように言う。

»Still! Still! Ward die Welt nicht eben vollkommen? Was geschieht mir doch?«

静かに！ 静かに！ 世界はいままさに完全になったのではないか？ それにしてもわたしの身に何が起るのであるうか？（氷上訳、同書p.234）

ここでツァラトゥストラは「世界はいままさに完全になったのではないか」

と自問している。そしてここでも自問する現在と「世界が完全になった」(ward-vollkommen)の過去との間に微妙なずれが存在している。自問するとき、先にも見たように、思考は完全になった世界からはその外に少しずれて存在しているのである。これが『ツァラトゥストラ』の中の世界が完全になるという事態を語る最初のテキストである⁽⁷⁾。

次いでこの時のツァラトゥストラの眠りの特異な性質が語られる。

» Wie ein zierlicher Wind, ungesehen, auf getäfeltem Meere tanzt, leicht, federleicht: so --tanzt der Schlaf auf mir.

Kein Auge drückt er mir zu, die Seele lässt er mir wach. Leicht ist er, wahrlich! Federleicht.«

それは、かわいらしい風が、だれの目に見られることもなく、鏡をはったように風いだ海の上で、かるく、羽毛のようにかるくおどるように、かるく、羽毛のように軽く、――そのように眠りはわたしの上でおどっている。

この眠りはわたしの目をとざさない。この眠りはわたしの魂を目覚めたままにしておく。この眠りはかるい、まことに、羽毛のようにかるい。(拙訳、同書p234)

この「Seele」を「魂」と訳したが、それは何らかの精神的実体を示すものではなく、感覚と思考の働きのきわめてデリケートな動きの場のことである。眠っているが目を閉ざすこともなく羽毛のように軽いなにかの動きをなにかの踊りとして感覚し、この状態が世界になった世界のありさまでないかと思考する。その状態のまま感覚と思考は進み、幸福感に到る。幸福感はこうである。

» Oh Glück! Oh Glück! Willst du wohl singen, oh meine Seele? Du liegst im Grase. Aber das ist die heimliche feierliche Stunde, wo kein Hirt seine Flöte bläst.

Scheue dich! Heisser Mittag schläft auf den Fluren. Singe, nicht! Still! Die Welt ist vollkommen.« (強調は引用者)

このところ氷上訳を紹介しておこう。

おお、幸福！ おお、幸福！ おまえは歌いたいのか、わたしの魂よ？ 草のなかに横たわって。だが、いまは牧人もその笛を吹かない、秘やかな、おごそかな時刻だ。

おそれるがいい！ 熱い正午が野づらにまどろんでいる。歌うな！ 静かにせよ！ 世界は完全だ！ (氷上訳、同書p235。強調は引用者)

ツァラトゥストラの魂(Seele)は幸福感にみたされ、歌いたい気持ちになっている。だが彼の魂の深みの思考はこれが「秘(ひそ)やかな、おごそかな時」、つまり「内密の、厳粛な時」(die heimliche und feierliche Stunde)なのだと認識し、彼に歌うことを止めさせる。それは熱い正午が野づらで眠っているからである。この時にこそ「世界が完全だ」ということが感得されなければならない。『Still! Die Welt ist vollkommen』と現在時制の動詞で言われる。『ツァラトゥストラ』の中で「世界が完全だ」と言われる数カ所の中でただこだけが動詞に「werden」(成る)ではなく「sein」(ある)が使われ、同時に過去時制ではなく現在時制で「ist」(いまある)が使われている。ここだけ「世界の完全」が現在のこととして表明されているのである。この現在時が感得されなければならない。このときは動くのだろうか。あるいはむしろ「世界の完全」は釘で打ち付けられるように現在時に打ち付けられるのではないだろうか？ 世界の完全性の感得とともに「世界は今完全態で存在している」という世界の時の流れることのない現在性が現れる。それが正午という時刻の恐るべき本質なのではないだろうか。このように流れることのない正午の時が感得されることこそ「正午の深淵」であり存在者が落ちることのある「永遠の井戸」であるように見える⁽⁸⁾。『ツァラトゥストラ』の中の「永遠帰郷」を言うさまざまな表現の中で世界の完全が現在したという表現はこことだけ見られるものであり、この地点こそが永遠帰郷の思想の様々な告知のなかで頂点をなした同時に際立った特異点をなしているのである。われわれはさらにこのすぐ後の叙述をみてみよう。そこでは重要なことが二つ言われている。一つは、このとき「年老いた正午」(der alte Mittag)もまた眠っているということである。この年老いた正午はすぐ後で「ひとつの神」(ein Gott)と呼ばれるが、世界の完全が持続される時を統べる存在と見なされる。その存在が眠っているということはツァラトゥストラの魂の側で世界の

完全の感得が維持され体験される状態が続いているということであり、不安定ながら流れることのない時の現在性が保たれているということである。もう一つのことは、その「正午」が眠りながら口を動かし完熟した黄金の幸福のしずくをまさに一滴だけ飲みそしておのれの幸福の笑みをうかべたとツァラトゥストラが見ていることである。正午が幸福の笑みをうかべるのはこの完全な世界の正午をツァラトゥストラが感得したことを正午がよるこんでいることの表明であり、感得したツァラトゥストラに対する正午による肯定である。そして正午のする肯定に対するツァラトゥストラの肯定の応答によって、この流れることのない正午の時の完全性はまったく完成をむかえ、それによって時は、静かな注意のなかで、過ぎ去る時に移行するのである。かくて世界の完全な時は現在から静かに過ぎ去る。

»---Was geschah mir? Horch! Flog die Zeit wohl davon? Falle ich nicht? Fiel ich nicht --- horch! in den Brunnen der Ewigkeit?«

——わたしはどうなったのだろう？ 耳を澄ませろ！ 時は飛び去ったのだろうか？ わたしは落ちていないか？ わたしは落ちていたのではないか、永遠の井戸の中へ？…耳を澄ませろ！ （拙訳、前掲書p.236）

ツァラトゥストラは自分に何が起こっているのかを自問し、そして自分の心臓を刺したものの、つまり今しがたの失ったばかりの幸福を求めて心臓が破れるばかりに渴望するのである。ここに次の文章が続く。

»--- Wie? Ward die Welt nicht eben vollkommen? Rund und reif? Oh des goldenen runden Reifs --- wohin fliegt er wohl? Laufe ich ihm nach! Husch!«（強調は引用者）

——どういふことだ？ 世界はまさに完成していたのではないか？ 円満に熟して？ おお、黄金の円満に熟成した世界…あの正午はどこへ向かって飛んでいるのだ？ わたしはそれを追って走ろう！ それっ！ （拙訳、同前所）⁽⁹⁾

「世界の完全」についての三番目の語りである。だが「ward」[ward]と「

過去時制を使った語りであり、完全の現在性が失われた場に身をおいた語りになっている。

このすぐ後でツァラトゥストラは手足を伸ばし自分は眠っていると感じたように叙述される。

» Still --- (und hier dehnte sich Zarathustra und fühlte, dass er schlafe) «⁽¹⁰⁾

ツァラトゥストラとしては走って正午を追いかけているつもりが、あたりはずっと静かなままで（still……）、その齟齬に、意識ある自分が気づき、半眠で思考する魂を目覚めさせにかかるのである。「起きろ、この眠りびとよ！ おまえ正午の眠りびと（Mittagschläfer）よ！」と彼は自分自身に言う。そして自分の足と心にはやく目覚めよと命ずる。だが彼はまた新たに眠り、彼の魂は彼に抗してふたたび身を横たえこう言う。

»Lass mich doch! Still! Ward nicht die Welt eben vollkommen? Oh des goldenen runden Balles!«（強調は引用者）

氷上訳を示そう。

「かまわないでくれ！ 静かに！ 世界はいままさに完全になったのではないか？ おお、みことな黄金の球よ！」（氷上訳、同書p.237）

ここでも世界の完全さは過去時制の否定疑問文（Ward nicht... vollkommen?）で言われている。この「世界の完全」の四度目の言明はわれわれにはいまや嗜眠者のいいわけと大差のないもののように聞こえる。「完全の現在」という現在のリアリティとは大幅に離れ、すでに日常の時空に戻っているようにみえるのである。だがここでニーチェはひとつの謎を投げかける。ツァラトゥストラはこの眠りびとたる彼の魂にたいして「なんとしたことだ。いつまでも寝ころんで、あくびをし、ためいきをし、そして深い井戸に落ちて行くのか？」（氷上訳、同前）と事実確認ともみえまた詠嘆ともみえる問いかけをし、そしてさらに「おまえはいったい何者なのだ？ おおわたしの魂よ！」（氷上同前）と問うのである。原文は次のものである。

»...Wie? Immer noch sich strecken, gähnen, seufzen, hinunterfallen in tiefe Brunnen?

Wer bist du doch? Oh meine Seele!»

ツァラトゥストラはほかならぬ自分の魂に何か途方もない事態が起こりかけているのを予知したようである。原文では上の引用文の一行目は、これがはたして誰の行動と呼んでいいのかわからないかのよう「[sich strecken, gähnen, seufzen, hinunterfallen]とその行動を動詞の不定詞形を使って語っているのである。ああかも無時間性のなかを何者かがふたたび永遠の井戸に落ちていつているような表現である。それゆえ「おまえはいつたい何者なのだ? おおわたしの魂よ!」という問いはきわめて深刻である。というのにも先に見た「世界が完全だ」という現在性は、時の流れない存在の無時間の時間性であり、そこに落ちた魂にとってはそこからの脱出法が見いだせないような正午の永遠性であり「永遠の井戸」なのである。それはツァラトゥストラ自身がそこへ落ちた自分の魂を目覚めさせ、引き上げる術が分からない特異な経験なのである。まっただき正午は永遠に帰還するとされる時間の流れの中の特異点を形成し、そこにおいては時の流れない今が持続するのである。その永遠の時の流れない今の完全性を深層の意識である魂が体得し体験する。

この上掲の場面においてツァラトゥストラの魂をこの世に引き戻すのはきわめて強力な出来事である。

»und hier erschrak er, denn ein Sonnenstrahl fiel von Himmel herunter auf sein Gesicht«

ここでツァラトゥストラはおどろいて、目をさました。ひとすじの光線が天空から彼の顔に射したからである。(永上訳、同前書 pp.237-238)

まるで天空がツァラトゥストラのようすを注意深く眺め永遠の井戸に落ちた彼の魂の声に耳を澄ませていたかのようにであるとされる。そしてツァラトゥストラは自らのことを「大地の万物の上におりた露のこの一滴」(dieser Tropfen

Thau's, der auf alle Erden-Dinge niederfiel) と呼び自分の身に起こったこの正午の出来事が万物一切に生じる出来事と見ている。この「露=わたしの魂」という把握は先に真夜中の出来事でも見たように、世界が完全になることを体験するための欠かすことのできない前提条件になっていると見ることが出来る。そしてこのわたしの驚くべき魂 (diese wunderliche Seele) は永遠の井戸という明るくすまじい正午の深淵の中へ飲み戻されるべき存在者なのである。すなわち個の万物一切への吸収である。

»... wann, Brunnen der Ewigkeit! du heiterer schauerlicher Mit-tags-Abgrund! Wann trinkst du meine Seele in dich zurück?»

おまえ永遠の井戸よ、晴れ晴れとしてすまじい正午の深淵よ! いつおまえはわたしの魂をおまえの中に飲み戻すのか? (拙訳、同書 pp.238)

個々の一切の存在者は永遠の井戸である正午の深淵の中でその他の万物一切のとの同一性を受け取るのである。

第三章 考察と結論：世界の完全の体験と永遠帰還

ここまでわれわれは『ツァラトゥストラ』第四部の第十九章「醉歌」第十段の「いままさにわたしの世界は完全になった。真夜中はまた正午なのだ」という表現を出発点に真夜中と正午の同一性もしくは同時性の根拠を同第十章「正午」にさぐりその同一性の根拠が「世界が完全になる」という体験にあるということを見た。しかし両者のなかで五回言われる世界=完全という言い方のなかに含まれる幾つかの問題についてまだ十分な考察を加えていなかった。それは次の四点に集約される。それは1. これら五回のなかで「世界は完全だ!」と動詞 [sein] の現在時制で語られるのは「正午」の章の二回目だけであること。そして2. 「正午」の章の他の三回では「世界は今まさに完全になったのではないか?」と [werden] の過去時制を使った否定疑問文で語られていること。3. 「醉歌」の章では「いままさにわたしの世界は完全になった」と [werden] の過去時制を使いながら断言として(直接法)肯定文で語られていること。そして4. 完全になったとされる世界が「正午」の章では定冠詞をつけて表現され「世界そのもの」が完全になったと言われるのに対し「醉歌」の章では完全

になったとされるのは所有冠詞をつけて「わたしの世界」と表現されていることである。まずはこの四つの問いをまとめて考察しておきたい。

上記の五回の「世界＝完全」経験の表現において核心をなすのは (sein) の現在時制で語られる「正午」の章の二回目の語りである。この経験こそが「永遠の井戸」に落ちる経験であり魂が永遠の、時の流れなくなった今の現在性に宙吊りになる経験であるとみなされる。この形式の、流れぬ時の現在性への宙吊りのみが、流れる時のなかで特異点をなす唯一の極限的な時の経験である。ただその体験のただなかにおいてのみ生成する世界の全体性が体得される。この全体性は変わることがない。この「時」は「同じものの永遠帰還」の体験を構成する。というのも生成するのは同じもののそのもの、生成するものの全体としてひとつの同じものであり、この同一のものが生成の（流れぬ今に宙吊りされるといふ）特異点において現在する (anwesen) のである。この問題についてハイデガーは「生成するものは同じもののそのものである。つまり、他のもののその都度の差異のなかで一つの同じもの（同一のもの）が生成するのである。同じものにおいて、ひとつの同一者の生成する現在性 (Anwesenheit) が思考されている」 (Was wird, ist das Gleiche selbst, will heißen: das Eine und Selbe (Identische) in der jeweiligen Verschiedenheit des Anderen. Im Gleichen ist werdende Anwesenheit des einen Identische gedacht) というが、彼のこの言明においては永遠帰還の体験が存在し、それが生成のなかの特異点を形成するということが考慮されていないように見える⁽¹⁾。「世界＝完全」経験の語りにおいてニーチェが「永遠の井戸に落ちる」ことを強調し「正午の深淵」について語るのは、この経験が生の中で「同じものの永遠帰還」を体験する特異な点を形成しているからである。そしてこの体験はまた（同一の体験という）同一性の目印をもつて反復される。というのもこの体験の時においては時が流れないという特異性をもつと同時に、「完全な世界」という生成するものの全体性に直面するからである。「歌うな！ 静かにせよ！ 世界は完全だ！」 (Singe, nicht; Still! Die Welt ist vollkommen) と世界の完全性が現在形で語られる時、われわれはテキストのこの場所において永遠帰還の体験を読み取らなければならない。

この現在時制で世界の完全性が語られるこの地点をロとすれば、「完全になった」と過去時制で語られる他の四つのテキストはロに地点に相当する。このとき「いままさに完全になった」という仕方では世界の完全性が終了しているから

である。それは流れない時の今から時の流れる今に、生成の一点としての今に場面が変転しているからである。「醉歌」の章の「いままさにわたしの世界は完全になった」という場面においては、事柄が過去時制の肯定文で語られ、完全の時は過ぎ去ったが、これは「正午」の章で経験したあの時と同じ時が経験されたのだということが言われている。永遠帰還の体験の反復が今終了したのである。ということが、わたしの反復した体験として安定的に確認されているのである。だからこそ「真夜中はまた正午なのだ」と言われるのである。「正午」の章で経験された世界の完全性が真夜中にまた体験された。この反復された世界の完全性の体験の同一性が真夜中と正午の同一性を証明する。対して「世界はいままさに完全になったのではないか？」と過去時制の否定疑問文で問われるこの言い方では、初めて体験した異常な充実をもった無時間の体験が、その体験のともまどいのなかで、やや外側から、肯定文で断言することのできない驚きとともに問い出されている。ロに地点の驚きが提示されていると見ることが出来る。だが相変わらずツァラトゥストラの魂が体験する世界の完全性がいつ始まりいつ終わったのかはツァラトゥストラ自身はつきりと言うことはできない。そしてこの体験が「同じものの永遠帰還」の体験であるとして、時間が飛び去ったかのごとく、現在が流れぬ今として体験されるこの体験の特異な時間性にどうして始まりと終わりがあるのか、はつきりと言うことはできない。その始まりが静かにすることによってしか聴きとり感じ取ることができないこと、このことは「正午」と「醉歌」の二つの章での語りによって確認することができる。だがとりわけ終わり方においてはそもそもどうして終わりが存在するのかということからして説明することができない。ツァラトゥストラの魂は繰り返しその流れぬ現在に落ち込もうとするのである。永遠の井戸からの脱出、それが生じうるためにはこの正午の時の持続そのものにある神が黄金のぶどう酒を含もうと口を動かすがごとき緩みがあるからと言うほかはない。脱出の成立には偶然性の働きが不可欠である。先に見た「正午」の章での目覚めには「ひとすじの光線が天空からかれの顔に射す」という強力な偶然の働きが必要であった。そのように、魂の感得する世界が完全になる今の時の持続にも強まりと緩みのあるリズムがあり、その緩みにおいては時の流れぬ今から時の流れる生成の時空への場の転換がありうるようにみえる。一八八六年末から一八八七年春にかけての遺稿のなかでニーチェが「万物が帰還する」という事、それは生成の世界の

存在の世界への最も極端な接近である」(Daß Alles wiederkehrt, ist die extremste Annäherung einer Welt des Werdens an die des Seins) (KSA, Bd.127 [45]) と「*「つゝやあ」*、ニーチェは万物が回帰するということを直接法現在で語る。これは彼がこの万物の回帰を事実と考えていたことを意味する。この事実性をニーチェはみずからの体験として知っていたと考えられる。ツァラトゥストラが「醉歌」のなかで語る「いままさにわたしの世界は完全になった」という言葉はニーチェの永遠回帰の体験のもっとも重要な部分、この最も肯定的な部分を語っているのである。その肯定的なもののもっとも暖かいものを彼はオルタのモンテ・サクロの山の中で、そしてタウテンブルクの城山の細道の中で経験したのではないだろうか。タウテンブルクでは夜の散歩もあったのではないだろうか。もっとも魅惑的な夢をニーチェはこのオルタとタウテンブルクのふたつの細道で見たのである⁽¹²⁾。

註

- (1) 一八八二年八月七日から二十六日までと考えられる。
- (2) Ernst Pfeiffer (Hrsg.): *Friedrich Nietzsche Paul Rée Lou von Salomé Die Dokumente ihrer Begegnung*, Insel Verlag, 1970, S.183,
Jena. Quartus Verlag, 1999, を参照。また拙ブログの《Was ich sah in Tautenburg 16.08.2016》:「世界とどう大きな書物」 中路正恒公式ブログ (webyrinf) 他参照(「タウテンブルク」でサイト内検索のこと)。
- (3) 氷上英廣訳『ツァラトゥストラはこう言った(下)』岩波文庫、p.325。同書からの完全な引用の場合は(氷上訳)と注記し、本論著者の責任で訳出する場合は(拙訳)と注記する。
- (4) Friedrich Nietzsche: *Also sprach Zarathustra*, (以下 Zar 略記) IV-19, Nachtwandler-Lied, 10/Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe (KSA 略記) Bd.4。
《Also sprach Zarathustra》の書名『ツァラトゥストラはこう言った』とその章名については上掲の氷上英廣訳に従う。
- (5) ちなみに登場する「ましな人間たち」とは、「預言者」(der Wahrsager)、「二人の王」(zwei Könige)、「良心的な学究」(der Gewissenhafte des Geistes)、「魔術師」(der Zauberer)、「老法王」(alter Papst)、「最も醜い人間」(der hässlichste Mensch)、「求めた乞食」(der freiwillige Bettler)、「そして」ツァラトゥストラの影」(der Schatten)である。彼らは多様でそれぞれ興味深い存在であるがここでは詳細は省く。「ましな人間」たちの意味についてはジル・ドゥルーズ「ニーチェと哲学」(安立和浩訳一九七四年、国文社)第五章七を参照された。 Gilles Deleuze: *Nietzsche et la philosophie*, P.U.F. 1962/73, V-7, pp.189-191.
- (6) すべての女性が考える「いま世界は完成した」という事例が Zar I-18 で語られている。だがこの箇所のことではここでは考慮の外に置いておくことにしたい。
- (7) この時の流れぬ永遠の井戸に落ちるというテーマを村上春樹は『ノルウェーの森』の「野の井戸」をめぐる思索の中で再び、だが否定的な仕方、取り上げているのではないだろうか。『ノルウェーの森』一九八七年、講談社、参照。
- (8) 今の [wohin fliegt er wohl?] の [er]、および [Laufe ich ihm nach!] の [ihm] は先にある神 (ein Gott) と呼ばれていた「年老いた正午」(der alte Mittag) を指しているかと解釈される。
- (9) この引用のなかの括弧内はナレーションなので客観的な語りとして「伸ばした」「感じた」と過去時制で語られている。だがそのなかの「自分は眠っている」は接続法 I 式現在で記されており「感じた」内容は感じた時点での現在の内容を示している。感じた内容を直接話法で書けば、「おれは眠っている」とツァラトゥストラは感じた、ということになる。手足を伸ばすなど目覚めてゆく動作をしながら「自分は眠っている」と感じているというところである。
- (10) Martin Heidegger: *Nietzsche* Bd. II, Verlag Günter Neske Pfullingen 1961, S.11.
- (11) ついで詳細に論じることができないがニーチェの永遠回帰の体験とその思想の形成にルー・フォン・ザロメがどう関わっているかを最も典型的に示すのは『ツァラトゥストラはこう言った』第三部15「第二の舞踏の歌」でありここでは「生」として登場している。そしてその最も深刻な相は一八八二年八月二十五日タウテンブルクでのルー宛ての紙片(書簡
- (12)

KSB,290) に読み取ることができ。そこにはこう記される。『Zu Bett. Hefigster Anfall. Ich verachte das Leben./ FN.』[＊] きわめて激しい発作 (heftigster Anfall) が起こっているのが今晚の共同研究はやめて床に就きます、というルーへの伝言である。その後の『Ich verachte das Leben.』[＊] (わたしは生を尊重しない) はこの発作がどういものであるかを洞察させる。ニーチェは「永遠の井戸」すなわち永遠回帰の体験の時の流れない現在に、引きさらわれているのである。永遠回帰の体験はその最も肯定的な面においても最も否定的な面においてもルー・ザロメとの関わりの時間の中で体験されているのである。

Midnight and Midday: Two Moments of Eternal Return by Nietzsche

Masatsune NAKAJI

Summary

In the fourth part of “Thus spoke Zarathustra” the perfection of the world is announced five times. Four times in the chapter of “Mittags” and once in “Das Nachtwandler-Lied”. Thus:

1. „Still! Stiill! Ward die Welt nicht eben vollkommen? Was geschieht mir doch?“ (Mittags)
2. „Scheue dich! Heisser Mittag schläft auf den Fluren. Singe nicht! Still! Die Welt ist vollkommen.“ (Mittags)
3. „—Wie? Ward die Welt nicht vollkommen? Rund und reif! Oh des goldenen Runden Reifs ---wohin fliegt er wohl?“ (Mittags)
4. „Lass mich doch! Still! Ward nicht die Welt eben vollkommen?“ (Mittags)

5. „Riecht ihr's nicht? Eben ward meine Welt vollkommen, Mitternacht ist auch Mittag,---“ (Nachtwandler-Lied)

Among these texts, only in the 2. and 5. the statement is said in the affirmative sentence. And 1.3.4. are said as a negative interrogation. And furthermore only the 2nd is said in present tense. We judge only in the 2nd sentence the certitude that ‘the world is perfect’ is directly delivered and this statement is upon the experience of ‘eternal return’. The 5th statement says that the perfection of his world has now just experienced and recognized as such. This sense of perfection of the world seems to me experienced by Nietzsche at the narrow road of Sacro-Monte di Orta and of Tautenburg both with his friend Lou von Salome.